

1910-16年のT. S. エリオットの詩における祖父の影響

The Influence of T. S. Eliot's Grandfather on His Poems from 1910 to 1916

古賀元章

Motoaki KOGA

英語教育講座

(平成24年10月1日受理)

はじめに

T. S. Eliot (1888-1965) は二度にわたって、両親一父親 Henry Ware Eliot, Sr. (1843-1919), 母親 Charlotte Champe Eliot (1843-1929) — のもとから離れて自立した人生を求める行動をとる。一度目は1910-11年にパリへ遊学することである。二度目は1914年にイギリスのオックスフォード大学のマートン・カレッジ (Merton College) に留学することである。これらの行動を執行する一因は、両親の厳格な家庭教育から逃れるためである。

この厳格な家庭教育の支柱となっているのは、高名なキリスト教ユニテリアン派¹の牧師で、エリオットの祖父(母親の義父)の William Greenleaf Eliot (1811-87) である。この宗教を土台にした祖父の偉業は、他人の追随を許さない社会活動(教会を建設したり、学校、大学、救貧基金、衛生委員会を設立したり、生活貧者や病人のために奉仕したりすると) (Ackroyd 16-17) である。したがって彼は、両親といえども逆らえないほど絶大な力を家庭に行使しているのである。

しかしながら、これまでのエリオット研究では彼が祖父の影響を受けている痕跡は十分に考察されていない。エリオットは、1916年にイギリスの観念論哲学者 F. H. Bradley (1846-1924) を研究対象とした博士号請求論文を書き上げる。ブラドリーの中心的な哲学概念は、完全無欠な実在の「絶対者」(the Absolute)² である。祖父は、エリオットが生まれたときすでに亡くなっているとはいえ、彼にとって、この「絶対者」にたとえられるように思われる。後述するように、この時期のエリオットはこの「絶対者」を信じないようになっている。それは、彼が祖父の影響力を回避して、自分の信じる人生を希求しようとする表れであると言えよう。

このようなエリオットの姿を考慮に入れて、本稿は1910-16年の彼の詩における祖父の影響を検討してみたい。

1

1910年は、自分の意志で親元を離れるという意味で、エリオットが最初に大胆な行為をした注目すべき年である。その行為は、ソルボンヌ大学で勉強するためパリへ行くことである。彼によれば、その理由は、本物の詩を学ぶためであり(“What France Means to You” 94), 1909-10年に批評家 Irving Babbitt (1865-1933) が開講したフランス文芸批評の講義に出席したため(“T. S. Eliot” 102) でもあるという。

それだけが理由ではない。文学に関心を寄せるエリオットは、1898年に生誕地のセントルイスにあるスミス・アカデミー (Smith Academy) に入学し、この学校の雑誌 *Smith Academy Record* で初めて散文や詩を公表する。このように文学への関心もあって、彼は翌年に “T. S. Eliot / The T. S. Eliot Co. / St.

Louis”と記した私家版の雑誌 *Fireside* を作成し、“Fiction, Gossip, Theatre, Jokes and all interesting”を扱っている (Soldo 13)。この雑誌ではパリの通りのスケッチが見られることから (Jain 268n)、スミス・アカデミー時代の彼は、すでにこの都市に興味を示している。彼がスミス・アカデミーに在学したのは1905年までである。息子の健康面を気づかった母親は彼に、この学校を卒業してハーバード大学を受験させず、同年にボストン郊外のミルトン・アカデミー (Milton Academy) に通わせている。エリオットは1906年にハーバード大学に入学し、2年後に学生会館の図書室でイギリスの詩人で批評家の Arthur Symonds (1865–1945) が著した *The Symbolist Movement in Literature* を見つけ、この著書で論じられているフランス象徴主義の詩人たちの作品に魅了される。彼はまた、翌年の学生文芸雑誌 *Harvard Advocate* の中で、“the Americans retained to their native country by business relations or socialities or by a sense of duty — the last reason implying a real sacrifice — while their hearts are always in Europe.” (“[A review of] *The Wine of the Puritans*. [By] Van Wyck Brooks 80; qtd. in Jain) と書いて、ヨーロッパに目を向けることを肯定的に論じている。このように、彼のパリ行きの願望は、彼が証言することよりもっとさかのぼって、スミス・アカデミー時代の文学関心や、大学時代のシモンズの本の興味が下地となっているのである。

エリオットの行動は、両親の家庭教育と無関係ではない。彼らは当初、このパリ行きに反対している。特に母親は、息子がパリで独りぼっちになることを心配するし、フランス文学を専攻したりフランス国民を称賛したりすることにも反対する (“To Her Son,” 3 Apr. 1910, *The Letters of T. S. Eliot, Vol. I*: 12)。両親の反対の態度は、エリオット家を死後も支配していた息子の祖父の遺訓とでもいうべきものと深く関係している。その遺訓とは、公共への義務、慈善、立派な仕事である (Pritchett 73)。エリオットは家庭で、祖父の教えに反する行為が罪であるという躰を受けたり (“American Literature and the American Language” 44)、物事の善悪を教えられたりしている (Levy and Scherle 121)。今回のパリ遊学は、こうした両親の教育から逸脱した行動であると判断されているのである。心身の疲労回復のためとはいえ、祖父は生涯に3回 (1847年、1849年、1870年) のヨーロッパに旅行している (Holt 75)。その旅行先にはパリも含まれている。この都市ではユニテリアン教会の確立に関する議論にかかわっている (Holt 28) ので、彼は旅行に単なる慰安を求めたのでは決していない。母親は、義父の真剣な姿勢と比べて息子の遊学に反対しているのである。

両親の家庭教育の土台となっているキリスト教ユニテリアン派を基盤にして、祖父は現実を重視して人間社会を改良する運動に最善を尽くし、先のエリオット家の遺訓を残している。一方エリオットは、ユニテリアン派を厚く信仰するように育てられたが (“To Sister Mary James Power,” 6 Dec. 1932; qtd. in Power 126)、この宗教の外で成長したと感じるばかりではなく (“[A review of] *Son of Woman: The Story of D. H. Lawrence*. By Middleton Murry” 771)、この宗教による行動規範を強要する家庭環境が重圧にもなるのである (Powel 4)。

エリオットは1909年にハーバード大学を卒業し、大学院で哲学を研究して翌年に修士号を修得する。その後彼は、両親を説得してパリへ1年間遊学して帰国する。しかしそこには、両親からの自立と彼らへの背信行為との板挟みになって苦しむ彼の姿が認められよう。この背信行為の奥には、祖父の見えざる重圧があることを看過できないように思われる。その重圧を調べるため、パリ遊学前後に書かれた詩の内容を見てみることにする。

2

“The Love Song of J. Alfred Prufrock” (1910–11) では、表題が示すように、主人公の語り手は J. アルフレッド・プルーフロックである。詩の冒頭で “Let us go then, you and I” (1)³ と語って、彼は話し相手を連れ立って出かける。彼らの行き先は、社交界の女性たちがいる部屋である。彼女たちは、イタリアルネサンス期の彫刻家、画家、建築家のミケランジェロ (1475–1564) を話題にしている。しかし彼は、彼女たちを急に意識して、次のように部屋の外に目を向ける。

The yellow fog that rubs its back upon the window-panes,
The yellow smoke that rubs its muzzle on the window-panes,
Licked its tongue into the corners of the evening,

Lingered upon the pools that stand in drains,
 Let fall upon its back the soot that falls from chimneys,
 Slipped by the terraces, made a sudden leap,
 And seeing that it was a soft October night,
 Curled once about the house, and fell asleep. (15-22)

エリオットの生家があったのミズーリ州セントルイスは、隣のイリノイ州にある炭田からゆっくりとやって来る濃霧で覆われていた (“Diktern og kritikeren T. S. Eliot å imorgen” 3)。その濃霧は、工場の煙突から出てミシシッピ河を横切っていたのである (Ackroyd 23)。1-2行目の霧や煙の動きは猫の動きにたとえられる。その背景には、当時のエリオットは黒猫が主人公の連載漫画 “Krazy Kat” を気に入っていたこと (Ackroyd 31) が考えられるけれども、更にさかのぼってセントルイスに住む父親がこの動物を好きであったこと⁴も考えられよう。そうすると、エリオットは父親も思い描きながら霧や煙の動きを書いていたのである。

この詩は、他にもセントルイスに関連した素材を含蓄している。ブルーロックという名前は、子供時代のエリオットがある店の看板から用いられている (Wyant I-8)。また、ブルーロックは、40歳位の男性であると同時に、詩人自身である (“T. S. Eliot ... An Interview” 17)。このように、主人公の言動には、エリオットの子供時代の個人的感情が投影されているのである。

歴史的に有名人を話題にする社交界の女性たちに接近するどころか、ブルーロックは自分の時間や中年特有の自分の身体 (禿げた頭、か細くなった手足) を妙に気にしながら次のように語る。

Do I dare
 Disturb the universe?
 In a minute there is time
 For decisions and revisions which a minute will reverse. (45-48)

ハーバード大学は、ボストン近郊のケンブリッジに存在する。ユニテリアン派の中心地のボストンは、“the Hub of the Universe” (徳永 22) という俗称で知られていた。そこで、2行目の “the universe” はこの俗称を踏まえているように思われる。エリオットは、ブルーロックが個人的問題を宇宙に言及して大言壮語する悲喜劇的な姿を提示する。その提示の仕方にユニテリアン派に基づくエリオット家の教育への反発を反映させている。その反発は、この宗教を通してエリオット家に絶対的な力を及ぼす祖父へと間接的に向けられているのである。

後にブルーロックは次のような内容を考える。

And I have known the eyes already, known them all —
 The eyes that I fix you in a formulated phrases, (55-56)

子供たちが義父 (エリオットの祖父) を忘れないようにするため、母親は1904年に *William Greenleaf Eliot* を出版する。この著書の中で、義父の美しい目の真剣な表情が紹介されている (58)。この記載と “The Love Song of J. Alfred Prufrock” でのセントルイスの描写に注目すると、“the eyes” (“The eyes”) は、母親や姉たちの目を暗示しているであろうし、エリオット家を支配している祖父の目も暗示しているであろう。そうすると、2行目の “a formulated phrases” は、この遺訓を踏まえた内容を指す文句だと思われる。このように判断すると、上の場面は、エリオットが生家で過ごしたときの日々の生活の重圧を、主人公の風刺の形で描いているのである。

祖父が著した *Lectures to Young Men* は、International History Library of Y. M. C. A. により全米に配布されたが、またエリオット家にも常備されていたに違いない (Miller 15)。同家に関する記述は十分に考えられるし、同書の内容も両親の言動を通して語られたであろう。この前提に基づいて論じることにする。祖父は、*Lectures to Young Men* の中で次のようなことを主張する。

Of all the influences in society, calculated to purify and elevate man's character, that of virtuous and well-educated women is perhaps the strongest. From the hollowed precincts of the domestic circle, it drives away all sinful pleasure; in the intercourse of social life, it makes virtue attractive and sin hateful. It touches the soul to its gentler issues, and bestows a grace upon whatever is noble in human life. An essential part of the education of a young man is in woman's society. He needs it as much as he needs the education of books, and its neglect is equally pernicious. (123-24)

若者の性格を向上させるには、有徳で十分な教育を受けた女性の役割が欠かせない。この役割は家庭でも社会でも必要である。こうした義父の教えにかなう女性を目指していたのが、知的で進歩的な考えの持ち主であるエリオットの母親と言える。

しかしエリオットは、祖父が主張する女性観に従って子供たちに教育をする母親のやり方に息苦しさを感じるのである。そのことが、先の詩行における目の描写に盛り込まれていたと判断できる。

この詩は次のような場面で終わる。

We have lingered in the chambers of the sea
By sea-girls wreathed with seaweed red and brown
Till human voices wake us, and we drown. (129-31)

“We” (“we”) や “us” は、プルーロックと同伴者である。彼は、一見にぎやかそうな部屋とは対照的に、物静かな海の部屋を望んでいる。この描写は、彼が部屋にいる婦人たちの存在を決して忘れていないことを逆説的に表現している。エリオット家のモットーは黙して行動することであった (*William Greenleaf Eliot* 358; Drew 165n)。⁵ 祖父は信仰における沈着な思考を説いていた (*Discourses on the Doctrines of Christianity* 129)。このような彼の控えめな姿勢がエリオット家のモットーとなっているように思われる。そのモットーが生家のたたずまいを反映した物静かな海の描写に反映されている。大学時代の友人 W. G. Tinckom-Fernandez は、エリオットがパリへ行く前にエリオット家が夏に過ごす別荘を訪れた際、静かな家族団らんを目撃している (81)。彼の目撃が生家の雰囲気を実証する。エリオットは、この別荘から見渡した漁港の景色が素晴らしかったし (“Publishers' Preface” vii)、ニューイングランド海岸沖の大西洋が少年時代の想像力をかき立てると述べている (“Address” 136)。このような思い出深い印象が赤や褐色の海草に反映されていると言えよう。生家の近くをミシシッピ河が流れていた。彼はまた、この河を洪水のとき見に行くのが楽しみであったとも述べている (“From a Distinguished Former St. Louisan” 3B; “Letter Cites City Influence on T. S. Eliot” 8S)。

そこで最終行の溺死のイメージは、帰国前のエリオットがニューイングランド海やミシシッピ河を身近に感じることを示唆する。それは、エリオットと重なるプルーロックが同伴者と一緒に忘れられない婦人たちのいる部屋に再び出かけた気持に駆られる姿を連想させるであろうし、同時に詩人がエリオット家に引き寄せられる姿も連想させるであろう。後者を裏付けるのは、彼が哲学を研究するためにパリから戻ることである (“Essays, Addresses, and Verses, 1939-1956” 1; Jain 59, 269n)。哲学の研究は両親が望んだものである (Ackroyd 65)。

ところで、主人公の同伴者 “you” は一体誰であろうか。エリオットが Kristian Smidt に出した手紙によれば、この人物は友人あるいは仲間、たぶん男性である (*Poetry and Belief in the Work of T. S. Eliot* 85)。この手紙の内容と “The Love Song of J. Alfred Prufrock” におけるセントルイスの描写から察して、同伴者はエリオットの子供時代の自己が想定される。エリオットは両親を説得してパリへ遊学したが、自分の求めるべき人生を探しながらも両親 (とりわけ母親) を強く意識している。その姿勢がプルーロックの優柔不断な言動に投影されていると言えよう。

3

“Portrait of a Lady” は、大学生の青年の語りと中年婦人の話し声を描いている。ある年の霧と煙で包まれた12月の午後、彼はこの婦人を訪れる。彼女は、親しい関係の雰囲気を醸し出すため、若いピアニスト

によるショパンの音楽を話題にする。しかし彼は、婦人に対するかすかな興味と、ここへ訪問したことの後悔が入り混じった気持ちを抱くようになる。婦人は、彼の心を引きつけるため、話し相手を持つことが生きがいであると熱っぽく語りかける。すると青年は、これまで笑みを浮かべて成り行きを静かに見守っていた態度に次のような変化が見られる。

— Let us take the air, in a tobacco trance,
Admire the monuments,
Discuss the late events,
Corrects our watches by the public clocks.
Then sit for half an hour and drink our blocks. (36-40)

彼は、言葉の端々に愛情をちらつかせる婦人の話に深入りしない手管を考える。それは、部屋の外の平凡な日常生活の事柄（記念碑、最近の出来事、公共の時計、僕たちの黒ビール）に頭を切り換えることである。その手管こそは、彼が神経の苛立ちを鎮めようとするためである。

ライラックの花が咲く翌年の4月、青年は婦人を再び訪れる。この花を生けた部屋で、彼女は枝をひねりながら人生論を熱心に語り、親密さを得ようとする。しかし、再び彼女の話に巻き込まれないようにするため、青年は次のような内容を脳裏に浮かべる。

I take my hat: how can I make a cowardly amends
For what she has said to me?
You will see me any morning in the park
Reading the comics and the sporting page.
Particular I remark.
An English countess goes upon the stage.
A Greek was murdered at a Polish dance,
Another bank defaulter has confessed. (69-76)

婦人へ冷笑を浮かべて対応した非礼な態度を反省しながらも、彼は公園で新聞の漫画やスポーツ欄を読んで心の平静さを維持しようとする。彼が新聞の中で注目するのは三面記事である。それは、イギリスの伯爵夫人の舞台活動、ギリシャ人の舞踏での殺害、もう1人の銀行員の公金横領の告白である。最初の記事は青年が婦人をまだ意識していることの表れであり、他の二つの記事は彼がこの女性に対する背信行為を自覚している表れである。こうした彼の心境を暗に映し出す三面記事の内容を、前回の訪問時での頭の切り換えの内容（記念碑、最近の出来事、公共の時計、僕たちの黒ビール）と比較すると、婦人に対する背信行為の罪悪感が前回の訪問よりも強くなっている。

同年の10月、海外留学することになる青年は、足取りも重く気分もすぐれないで別れの挨拶をするため婦人に会う。ところが婦人は、彼の予想に反し、“We must leave it now to late. / You will write, at any rate. / Perhaps it is not too late. / I shall site here, serving tea to friends.” (105-08) と話して、彼の海外留学を好意的に受け止める。

青年は、婦人が自分の将来を考えた反応をすることに驚き戸惑う。その結果、彼の心の中では次のような出来事が起こる。

And I must borrow every changing shape
To find expression ... dance, dance
Like a dancing bear,
Cry like a parrot, chatter like an ape.
Let us take the air, in a tobacco trance — (109-113)

感情が凄まじく爆発する様子は彼の心の揺らぎの度合いを暗示する。その様子を表す様態（熊の踊り、おお

むの鳴き声、猿のお喋り)は、身に降り掛かる不測の事態を乗り切ろうとする点で、二度目の訪問の場合よりも相手への罪悪感が一層強くなっている。彼はしばらくして我に返るものの、やはり足取りも重く気分もすぐれないで立ち去ったであろう。

結局この詩の最終行は、これまでの行為を問う青年の次のような言葉を伝えている。

And should I have the right to smile? (124)

彼は婦人への冷笑的な態度を思い返している。この姿から察して、彼はこの女性との付き合いを海外留学する前の経験として簡単に片付けることができないである。最終行は、これからも良心の呵責に悩まされる彼の姿を示唆しているであろう。

エリオットの大学時代の友人、詩人、批評家である Conrad Aiken (1889-1973) は学生時代に彼と一緒に、ボストン市内のビーコン・ヒル (Beacon Hill) に住む女性を訪問している。エイケンには、来訪者たちにお茶を出す彼女が“Portrait of a Lady”に登場する中年婦人のモデルであると断定している (186)。この訪問は、エリオットがパリへ遊学する前の出来事である。また、“Portrait of a Lady”は、青年が婦人から受けるお茶の接待や、彼が海外留学する前の話を描いている。このような内容に注意を払うと、エイケンの断定はうなずける。

そうすると、青年の言動には彼と同じような立場に置かれたエリオットの個人的感情が反映されているであろう。母親はエリオットを過保護なまでに育てている。そのことの一部は、スミス・アカデミーからハーバード大学までの息子への学校進路を決めた彼女の態度に表れている。母親はまた、ミルトン・アカデミーに在籍中の息子の生活を心配して、校長に八通の手紙を書いている (*Letters, Vol. I* 3-10)。これらの行為が物語るように、彼には母親の影がたえず付きまとっている。祖父が *Lectures to Young Men* の中で若者の健全な成長ために主張する内容には、家庭での女性の重要な役割の他に、肉欲の抑制 (121-27; Miller 15) やアルコール飲料の禁止 (94-107; Miller 15) がある。青年の態度に見られたのは、婦人の話を冷ややかな態度で聞くこと、異性への興味、黒ビールへの頭の切り換えである。これらの事柄はすべて祖父の教えに背く行為である。したがってエリオットの詩の表現には、祖父の教えに従順な両親が行う家庭教育への反抗が認められる。この反抗は、青年が訪問を重ねるにしたがって心の乱れを激しく見せたのに合致して、強くなっているのである。それは同時に、多弁を避けて口数少なく振る舞うことを重視するエリオット家のモットーへの抵抗の強さへとつながるのである。したがって、“Portrait of a Lady”で中年婦人を描いていたとき、彼は母親の存在も意識していたばかりではなく、その背後にいる祖父の存在も脳裏に根強く焼き付いていたのだと言えよう。

この詩の最終行を考察すると、青年は婦人への背信行為のため良心の呵責に苦しむことが予期された。その姿には、祖父の教えに素直な母親への対応で苦悩するエリオットの姿が投影されているように思われる。

4

“Preludes”は場末を背景として、四つのスケッチ(冬の夕暮れ、翌日の朝、同日の夜と翌朝、その翌朝の夕暮れ)を描いている。第一前奏曲の場面では、風を伴った夕立が枯れ葉や紙屑をくるみ、壊れたよろい戸や煙突の頭部をたたき、街頭の寂しげな辻馬車が息をはいて足を踏みならす。これらの光景からこの前奏曲の終わりの“*And then the lighting of the lamps.*” (13)になると、その詩行から連想されるのは今日も暮れ行く場末の空しさである。第二前奏曲の冒頭では、早朝にコーヒースタンドへ押しかける人々の泥だらけの足で踏まれた街が、気の抜けたビールのかすかな匂いを漂わせ、翌日も繰り返される場末のわびしさを醸し出す。

第一前奏曲の原題はエリオットの鉛筆で“Roxbury”と書かれていたし、第二前奏曲の原題は同じく鉛筆で“Prelude in Roxbury”と書かれていた (*Inventions of the March Hare* 336)。“Roxbury”はボストン郊外の住宅地であったので、ハーバードの学生時代に起草された二つの場面は、彼の学生時代のロックスベリーが参考にされている。そこには、彼に強い印象が焼き付いている光景の影響が考えられる。その光景は、少年エリオットの生家周辺のスラム状態に近い地域である (“*The Influence of landscape upon the Poet*” 421-22)。このような地域を観察した経験があったため、学生の彼はボストン郊外の住宅地の状況を

詩の素材として用いているのである。

第二前奏曲では場末のわびしさが想像された。第三前奏曲は、そうした環境の中で生活する1人の女性を紹介する。彼女の生活状態は、不眠の夜や朝の大儀そうな起床からうかがわれるように、悲哀なものである。パリ遊学中に脱稿された第三前奏曲の光景は、原題の一部が“Prelude in Roxbury” (*Inventions of the March Hare* 336) であったので、やはり生家の周辺地域の上にボストン郊外の住宅地が重なったイメージであると言えよう。

最後の第四前奏曲の冒頭は、“His soul”が大空に横切るか、4, 5, 6時にしつこい泥足で踏みつけられるという表現である。この男は、第三前奏曲で登場した女性の相手であると考えられる。彼はこの女性と一夜を明かして帰宅したことであろう。第三前奏曲に登場した女性と、第四前奏曲に登場した彼女の相手とおぼしき男との愛の不毛には、両親が行った肉欲禁止の教育が反映されている。この教育はもちろん、エリオットの祖父の教えを実践するものである。張り詰めた男の魂の状態は俗物根性の彼の姿を示唆するし、泥足で踏みつけられる印象は彼が早朝にコーヒースタンドへ押しかける人であると思われる。ここでも、生家の近くで見かけたスラム状態の地域を原風景として詩作するエリオットの姿勢が認められる。

第一前奏曲から第四前奏曲までの様々な場面を観察して、語り手は次のように胸の思いを吐露する。

I am moved by fancies that are curled
Around these images, and cling:
The notion of some infinitely gentle
Infinitely suffering thing. (48-51)

語り手は、場末についての空想に心を動かされたことを述べてきた。エリオットは語り手を介して、そこで生活する人々に対して二つの見方（風刺、憐憫の情）を抱いているように思われる。こうした見方について、以下で順に検討してみたい。

“thing”という語は画一的で活気のない場末の生活風景を連想させる。この連想から、人間社会の空虚な実態が浮かび上がってくる。そこには、母親の優生思想の影響が考えられる。1865年にオーストリアの司祭で植物学者の Gregor Johann Mendel (1822-84) が遺伝の法則を発表する。後にこの遺伝の法則が「メンデルの法則」⁶として知られるようになる。1907年にイギリスで彼の遺伝学説を土台にして「優生教育教会」(Eugenics Education Society) が創立される。この協会はセントルイスでも設立される (*T. S. Eliot and the Poetics of Evolution* 51)。この都市で社会活動をする母親が優生思想を学んだことは十分に考えられる。なぜなら、エリオットが1915年6月15日にイギリスで同国人 Vivienne Haigh-Wood (1888-1947) と両親に知らせないで電撃結婚したとき、彼女は優生学的によくないと述べている⁷からである (“To Thomas Lamb Eliot,” 7 May 1923, *Letters*, Vol. 2: 125)。その意味で、母親は優生学的見地からも息子のパリ遊学に反対したと言える。ところが、エリオットは優生思想による母親の家庭教育に必ずしも従順でないことを風刺という方法で詩に表現しているのである。

他方、“thing”を修飾する“The notion of some infinitely gentle / Infinitely suffering”から判断すると、彼は場末の人々に憐憫の情を寄せているのがわかる。人間の進歩と人格形成を促すため、母親は、たとえば、不幸な子供たちの救済⁸、女性の地位向上⁹、貧民の救済¹⁰、教会の学校教育¹¹、少年の保護観察と裁判法の成立¹²に積極的に取り組んでいる。彼女の知人の Scudder は、母親が弱者救済や社会的貢献に愛と共感で取り組んだと証言している (In Memoriam: Mrs. Henry Ware Eliot)。このような彼女の取り組みが、場末で生きる人々に対する息子の憐憫の情に受け継がれているであろう。

母親の優生思想と弱者救済は、人間の進歩と人格の形成を目標にするという点でつながっている。これらの考えによる母親の社会活動の目的は、既述した義父の社会活動の目的と一致している。彼女の人生や社会活動は義父の影響を受けている。それは同時に、エリオットが母親を通して、祖父の影響を受けていることを意味するのである。

“Preludes”は次のような場面で終わる。

The worlds revolve like ancient women

Gathering fuel in vacant lots. (53-54)

老婆のイメージは毎日を空しく過ごす人間社会を思い起こさせる。このような老婆のイメージに等しく見なされる“The worlds”（複数形に注意）は、この詩の四つの前奏曲を総合して、場末全体の退廃的な実態をわれわれに喚起する表現となっている。こうした全体像には、語り手の言動を媒介して、エリオットが場末の劣等な人々を見つめる姿や、彼らの現実に同情を注ぐ憐れみの姿が感じられる。ここでも、母親が抱く優生学や弱者救済の思想のもとで教育を受けた彼の詩作が考えられる。

老婆は空き地で巻きを拾い集めて火を起こそうとする。“The Love Song of J. Alfred Prufrock”の草稿のエピグラフは、中世イタリア詩人 Dante Alighieri (1265–1321) の *Divine Comedy* の *Purgatorio* 26: 147-48 であった (*Inventions* 36)。ダンテの場面に登場する 12 世紀の吟遊詩人アルナウト (Arnaut) が罪を浄める火の中に飛び込む。エリオットの解釈によれば、彼は浄罪のため自ら苦しんで至福の状態に置かれているという (*Dante* 40)。そうすると、老婆の行為が示唆するのは、エリオットがこの罪人のように積極的な行為を羨望し、人間社会の中で生きる意義を求める態度であろう。上の最終行は、彼がパリ遊学から帰国して脱稿されたので、両親の影響や、その背景にある祖父の影響を受けながらも、自分の求めるべき人生を母国でも見出さないでいる苦悩者としての彼を浮き彫りにするのである。

5

“Rhapsody of a Windy Night”の背景も場末である。真夜中、月光に照らされた街路がある。街灯に明かりが付き、男がとぼとぼと歩いている。ところが、街灯の一つひとつは彼の心を激しく揺さぶって歩みを止める。その結果、街灯は彼にとって、無視できない存在となる。

午前 1 時半、街灯が突然語り始めると、男は次のような体験をする。

Half-past one,
The street-lamp sputtered,
The street-lamp muttered,
The street-lamp said, 'Regard that woman
Who hestates towards you in the light of the door
Which opens on her like a grin.
You see the border of her dress
Is torn and stained with sand,
And you see the corner of her eye
Twists like a crooked pin.' (13-22)

彼は戸口に立つ娼婦の方へ目を向ける。彼女は言い寄ろうかどうかためらっている。戸口のドアの開き具合は、彼女が歯をむき出してにやにや笑う様子に擬人化されている。この擬人化は、彼女が誘惑したい表情でもある。ドレスの裾の擦り切れや媚びたような目尻の皺は、落ちぶれた生活をうかがわせる。

このような娼婦を描くエリオットの心境を理解する手がかりを与えるのは、彼がエイケンに出した 1914 年 12 月 31 日付の手紙であろう。そこでは、次のような内容が述べられている。

Oxford is very pretty, but I don't like to be dead. I don't think I should stay there another year, in any case; but I should not mind being in London, to work at the British Museum. How much more self-conscious one is in a big city! Have you noticed it? Just at present this is an inconvenience, for I have been going through one of those nervous sexual attacks which I suffer from when alone in a city. Why I had almost none last fall I don't know — this is the worst since Paris. I never have them in the country.... One walks about with one's desires, and one's refinement rises up like a wall whenever opportunity approaches. (*Letters, Vol. 1* : 81-82)

エリオットは、哲学を研究する目的で1914年にハーバードからジェルドン在外研究奨学金 (Sheldon Traveling Fellowship) をもらい、オックスフォード大学のマートン・カレッジへ入学している。彼はこの大学のあるオックスフォードで生活することの重圧を述べている。こうした都会の息苦しさは、パリ以来の神経症の性的衝動によるものであるという。パリ以来とは、彼がこの都市を遊学した時期以来を指す。その時期に脱稿されたのが“Rhapsody on a Windy Night”である。そうすると、この詩でも、戸口の娼婦に対して男が躊躇する行為に両親の禁欲を奨励する教育の力が及んでいるのである。

1時間後、街灯は男に次のように語る。

‘Remark the cat which flattens itself in the gutter,
Slips out its tongue
And devours a morsel of racid butter.’ (35-37)

街灯が指し示すのは、溝で一片の腐ったバターを食らいつく猫のありのままの姿である。これは、場末で生きるために一生懸命な動物を紹介している。このような街はずれの場面には、エリオットの生家やハーバード大学の近辺地域が土台となっているように思われる。ここには、母親の優生思想を全面的に受け入れないが、彼女の社会的弱者へのいたわりに共鳴する彼の複雑な心境が認められよう。

“Rhapsody of a Windy Night”の最後の場面では、男が午前四時に部屋に帰宅する。彼の目に映るのは、いつも見かける部屋の光景（玄関の扉の番地、部屋までの階段の小さな灯り、戸口、ベッド、壁に掛かっている歯ブラシ）である。こうした光景を確認した後、彼は眠って朝を迎え、昨夜と同じようなわびしい場末の状況を体験するであろう。そこには、パリでも自分の生き方について悩み続けるエリオットの心理が描かれている。

結果として、1911年9月、エリオットは両親の希望に従って帰国し、博士課程で哲学研究に専念する。彼はパリ遊学中に関心を持ったフランスの哲学者 Henri Bergson (1859-1941) の哲学の特徴を問題にした草稿“Draft of a Paper on Bergson”を脱稿する。そこでは、問題点の一つが“antithesis of extrinsic and intrinsic multiplicity” (qtd. in Habib 42) と記入されている。ベルグソンが *Time and Will* で述べるのは、エリオットから見て、大小といった量の外的（意識外の）多様性と、深い喜びや悲しみ、内省的激情、美的情緒といった自己充足的なものについての純粋な強さのような内在的（意識内の）多様性である。彼が注目するのは、先の問題点の内容から判断して、これらの多様性の対照である。

エリオットはこの著書でのベルグソンの美的感情論に触れる。ベルグソンは基礎的情緒の性質や大きさを増大させる要素として美的感情を見なす。まるで被術者が催眠術師の身振りに従うように、芸術家（自然）の感情が提示されると、われわれはその自然に共感することがある。その際、われわれの美的感情には、催眠状態のように、区別ある段階がある。そこで、芸術家がわれわれに暗示する感情や思想は、程度の違いこそあれ、彼の心の歴史を要約して表現している (*Time and Free Will* 11-18)。こうした美的感情論を例に挙げて、内在性と外在性の多様性が時空的なものであると見なして (Habib 45)、ベルグソンの二元論を批評する。そのことが、先の問題点に示唆されていたと言えよう。エリオットの批評の拠り所となっているのは、イギリスの観念論哲学者である F. H. Bradley (1846-1924) が完全無欠の实在である「絶対者」(the Absolute) を根本とする一元論である (Habib 45-46)。

“Draft of a Paper on Bergson”では、“nothing essentially new can ever happen; the absolute, as Bradley says, bears buds and flowers and fruit at once ... A is already so completely B, and B so completely A that there is nothing to say about either ... This is my interpretation of Bergson.” (qtd. in Habib 53) が結論となっている。ブラッドリーの「絶対者」が、芽と花と実を完備した实在として考えられている。エリオットは、「絶対者」と仮象の相関関係を土台とする一元論を展開していたのである。

ところで、家族の者たちから仰ぎ見られる祖父は、死後の彼を強く意識するエリオットにとって、「絶対者」のような存在であった¹³と言える。祖父はまた、程度の差こそあれ、彼らと相関関係であったとも言える。その意味で、エリオットのブラッドリー論には、祖父と深いかわりがあるように思われる。彼の哲学的思考には祖父の威光が重圧となって影を落としているのである。

1914年、エリオットは再び祖国を離れる決意をする。彼の堅い決意は母校で勉強する哲学書にうかがわれる。1912-13年、彼はエール大学からの客員教授で観念論哲学者の Charles Montague Bakewell (1867

-1957) の二つのセミナーを受講する。それは、1912年の秋と翌年の春の“Nature of Reality”と1913年春の“Kantian Philosophy”である。エリオットが後者のセミナーのために書いたのが、未発表の原稿 *Three Essays on Kant* である。この原稿の参考図書として利用されたのが、ベイクエルの *Source Book in American Philosophy* である。彼はその参考図書で次のような文章に注目している。

I have sought to understand myself. (Bakewell 34; “Circles of Progress in T. S. Eliot’s Poetry” 68)

In the circumference of a circle beginning and end coincide. (Bakewell 34; “Circles of Progress in T. S. Eliot’s Poetry” 97)

二つの文章の内容を手がかりにして、当時のエリオットの心境を推し量ってみたい。最初の文章から人生の進むべき道を希求する彼の姿が読み取れるであろう。二番目の文章について、始まりに終わりが内在し、終わりに始まりが内在する円環のイメージだと解釈すれば、そこから新しい人生の始まりは両親との決別につながるという意味になるであろう。その決別の実現は、今ハーバードにいる時であると判断される。このような考えをする彼の姿を思い浮かべることができようと思われる。

6

エリオットは親元から離れる二度目の行動をとる。それは、在外研究奨学金を獲得したので、イギリスのマートン・カレッジで哲学を研究することである。今回の行動は両親から強く反対されなかった。その理由は彼らが望む研究分野だったからである。イギリスへ行く前に、彼は夏期講座を受けるつもりでドイツのマールブルク (Marburg) に滞在する。彼は当地から、エイケンに旅の疲れをとるため、のんびりと過ごしているという手紙を書き、2編の未発表の詩を同封する (25 July 1914, *Letters*, Vol. 1: 49-50)。1つの詩は“*Oh little voices of the throats of men*”である。この詩には次のような表現がある。

Appearances, appearances, he said,
 And nowise real; unreal, and yet true;
 Untrue, yet real — of what are you afraid?
 Hopeful of what? Whether you keep thanksgiving,
 Or pray for earth on tired body and head,
 This word is true on all the paths you tread
 As ture as true need be, when all is said:
 That if you find no truth among the living
 you will not find much truth among the dead.
 No other time but now, no other place than here, he said. (25-34; *Inventions* 75)

大学院生のエリオットは、John Watson 抄訳の *The Philosophy of Kant* の37頁の文章“*For the truth is, that, however far we may carry our investigations into the world of sense, we never can come into contact with aught but appearances.*”に1913年3月3日の読書の日付を記している (*Inventions* 259n)。当時の彼は、ブラッドリーの *Appearance and Reality* を購入し (Ackroyd 48)、この哲学者が書いた本を熟読している (Smith 94)。これらの行為から、“Appearances” (“appearances”) はブラッドリーの哲学概念の仮象を指しているし、“he”はこの哲学者を指している。そこで、この詩の語りはエリオットを暗示し、“you”は彼の内面の自己を暗示する。そうすると、“he”は単にブラッドリーだけに言及している (Mayer 142) だけではなく、マールブルクに来る前にハーバードで彼を研究していた頃のエリオット自身にも言及しているであろう。あらゆる観念に宿る真理やあらゆる存在に宿る実在が目指すところには完全無欠な「絶対者」の生命があるし、われわれの感覚による仮象と実在とは不可分の関係にある (*Appearance and Reality* 431-32) ことを、エリオットは学んでいる。したがって、このように対象間の相関関係を参考にして、彼は自分の哲学の研究を自問しているのである。その結果、彼が得た結論は、対象間の相関関係を探

究する出発点が〈今・ここ〉であると言えよう。それは、両親との関係やその背景にある祖父との関係が、〈今・ここ〉で考えなければならないことを意味する。

エリオットが同封した別の未発表は“The Love Song of St. Sebastian”である。語り手は、セバスチヤンの新たな洗礼者になることを願い、次のような場面で終えている。

You would love me because I should have strangled you
 And because of my infamy;
 And I should love you the more because I mangled you
 And because you were no longer beautiful
 To anyone but me. (34-38; *Inventions* 78-79)

語り手は、相手の“you”が気に入るように自分の言動を弁明している。その理由は、新しい自分を相手から愛してもらうためである。ここでも語り手の気持ちに当時のエリオットの気持ちが盛り込まれているのであれば、相手は誰であると考えられるであろうか。この点を検討してみたい。

エリオットの親戚の Richard Scott によれば、彼がアメリカを離れたのは恐るべき母親から逃れるためであった (“The Return of T. S. Eliot” 54)。そのことは、1910-11年のパリ遊学ばかりではなく、今回の海外留学にも当てはまるであろう。彼が哲学を勉強するのであれば、そのことを望む母親から反対されないで済むからである。

このような論述から、語り手の恋歌の相手はエリオットの母親を暗に指すであろう。母国でのエリオットは、家訓、つまり祖父の遺訓を忠実に実行する母親の躰に十分に馴染めなかった。相手の絞殺という語り手の恥すべき行為は、新たな母親のイメージを構築したいエリオットの羨望を遠回しに言い表しているように思われる。それは、母親を敬愛するが故の羨望である。

エリオットは先の手紙の中でエイケンに、“The Love Song of St. Sebastian”の一部が病的で、狂気の部類に属するかもしれないと述べている (*Inventions* 259n)。この叙述は、“Oh little voices of the throats of men”にも同じような印象を与えているであろう。そうすると、これら二つの未発表の詩の表現内容は、エリオットがマールブルクでも、家族との関係で抱く苦しみを解き放とうとする試みを描いていると言える。それは同時に、エリオット家を墓場から支配していた祖父の影響力を回避しようとすることを意味する。

第一次世界大戦 (1914-18) が勃発したため、エリオットは慌ただしくドイツの町を離れ、1914年8月にロンドンに到着して部屋を借り、10月にマートン・カレッジへ入学する。9月22日にエイケンの紹介で、エリオットはロンドンを拠点にして文学の改革運動を積極的に推進していたアメリカの詩人で批評家の Ezra Pound (1885-1972) の家を訪れる。エリオットはパウンドについて、ハーバードにいたとき特別な印象を持っていなかったし (Plimpton 98)、会った当初も同じ印象を持っていた (“To Aiken,” 30 Sept. 1914, *Letters*, Vol. 1 63)。

パウンドの方は、エリオットの詩の才能を高く評価し、自分が通信員をしていたシカゴの雑誌 *Poetry* の主宰者で、女流詩人、批評家の Harriet Monroe (1860-1936) に彼を推薦する手紙を書き (Sept. 30. 1914, *The Letters of Ezra Pound* 80)、1915年6月の同雑誌に“The Love Song of J. Alfred Prufrock”が掲載される。また、1915年に書き上げた3つの詩 (“The Boston Evening Transcript”, “Aunt Helen”, “Cousin Nancy”) が、“Three Poems”というタイトルで同年10月に *Poetry* に発表される。その上パウンドは、文学改革の仲間、批評家、小説家、画家の Wyndham Lewis (1884-1957) が主宰する雑誌 *Blast* (1915年7月発行) に、彼がパリ遊学中に脱稿した2つの詩 (“Preludes”, “Rhapsody on a Windy Night”) を含んだ “Poems” を発表することに尽力する。

こうしてエリオットは、詩に対するパウンドの飽くなき情熱に心を奪われるようになる (“Ezra Pound” 327)。その結果、彼はイギリスにそのまま住んで詩作に専念する気になる (“To Henry Ware Eliot, Sr.,” 23 July 1915, *Letters*, Vol. 1: 119)。

そこで、パウンドと出会って以降にエリオットが書いた1915年の作から3つの短い詩を考察してみることにする。¹⁴ “The Boston Evening Transcript”の語り手は街はずれに目を向ける。夕暮れになると、日中の生活環境から解放されて、何かをしたくなる気持ちが沸き起こる人々もいれば、ボストン夕刊紙を読むのがお決まりのコースである人々もいる。語り手は、生活様式が異なっても、一生懸命に生きている場末

の人々への哀れみの情を抱いている。“Aunt Helen”では、語り手がヘレン伯母さんの死に関する話を述べている。生前中に4人の使用人の世話を受けていたとはいえ、独身であった彼女の生活は質素であった。彼女が亡くなったとき、街はずれは天まで届くような悲しみに包まれたという。“Aunt Helen”も、“The Boston Evening Transcript”と同様に、場末での人々の暮らし向きの断片を描写している。このような描写には、エリオットが母親から学んだ社会的弱者への思いが盛り込まれているし、その背後には社会改革に取り組んだ祖父の影響力が及んでいるのである。

“Cousin Nancy”では、女性の礼儀正しさを重んじる伯母さん連中が、ニューイングランドのナンシー・エリコットの喫煙やダンスに理解を示さなかったことを伝えている。最初は品位のある女性に反するナンシーの振る舞いへの風刺と思われたが、その風刺が伯母さん連中の上品な社会に潜む虚飾な世界に注がれている。そこには、祖父を尊敬するエリオット家の慎ましくも、気品が高い家庭的雰囲気へのエリオットの反感が間接的に表れているのである。

1916年、“Conversation Galante” (1909)、“La Figlia Che Piange” (1911)、“Mr. Apollinax” (1915)、“Morning at the Window” (1915)を取めた“Observations”というタイトルの詩集が*Poetry*に公表される。“Conversation Galante”では、語り手は婦人と会話する。彼は頭上の月を自分たちの感傷的な友だちにたとえたり、哀れな旅行者を困らせる風船にたとえたりする。彼はまた、ピアノによる絶妙な夜想曲で夜や月光を説明する。真面目なのか遊び戯れているのかわからない相手に対して、彼女は苛立ちを感じる始末である。表題が嘆く少女を意味する“La Figlia Che Piange”の表題は嘆く少女を意味。この詩では、語り手が相手に棄てられた彼女の心痛を慰めるため助言をしたり、自分が彼女の恋人に扮した状況を考えたりする。ついに彼は、自分の行いを問い直す。二つの詩は、男女間の不毛の愛を扱っている。“Mr. Apollinax”に登場するアポリナックス氏は大口を開けて笑う癖がある。一方、上流社会に属するフラックス夫人 (Mrs. Phlaccus) とチータ教授夫妻 (Professor and Mrs. Cheetah) について語り手が記憶するのは、一切れのレモンのきれいな食べ方とマカロンの食べ残しである。この記憶は、上流社会の人々の素行が、アポリナックス氏の下品な仕草とたいして変わらないことを示唆する。“Morning at the Window”の場末の女中たちは勝手口で朝食のときの皿をガラガラ鳴らして洗っているが、気は澆刺としていない。場末で精いっぱい生きる彼女たちの姿を伝えている。

これら4つの詩のテーマは社会風刺 (男女間の不毛の愛、うわべを飾る上流社交界、場末) である。場末の描写には、母親やその背後にいる祖父の社会的弱者への思いやりの影響があるものの、こうした社会風刺にもその祖父への彼の反発が投影されている。とはいえ、詩集の表題の“Observations”は、語り手たちがある距離を置いて人間社会を観察することを表している。そこで彼らの観察態度にも、静かに考え、黙して行動すべきであるという祖父の教えの影響が認められよう。

上述の詩集の表題は、ドイツのマールブルクで未発表の詩について指摘したように、〈今・ここ〉を認識の土台とするエリオットの姿勢を示唆している。その表題は同時に、彼が1915-16年の詩を通して、祖父が支配するエリオット家から離れてイギリスで住むことを考えていたと言える。その点を以下で掘り下げて追及してみたい。

ところで、新妻がUボートの攻撃による身の危険を主張したので、1915年7月下旬にエリオットは単身で帰国して両親と再会する。両親から留学先で博士論文だけは書き上げるように依頼され、彼はその依頼を了承して (Ackroyd 65)、イギリスへ戻る。こうして、彼が博士論文“Experience and the Object of Knowledge in the Philosophy of F. H. Bradley”を執筆したのは、両親への義務感によるものである (Brooker 8)。そのことは、両親に再会する前、彼がすでにブラッドリーの重要な概念「絶対者」を信じなくなっている (“To Norbert Wiener,” 6 Jan. 1915, *Letters*, Vol. 1 88) ことからうかがわれる。

1916年4月、エリオットの博士論文が完成される。彼は、この博士論文を審査する母校のハーバード大学の口述試験に出席しなかったので、学位を取得できなかった。彼の気持ちはイギリスで生活することに決めていたのである。「絶対者」への不信は、彼にとって、祖父の影響力を振り払おうとする決意の表れであるとも判断できる。しかし、1915-16年の詩の表現内容が物語るように、彼はその影響力から完全に逃れることができているのである。

おわりに

エリオットは人生において、自分自身が望む生き方を模索する行動を二度する。それは、直接的には両親の庇護から解き放たれることを目的とするものである。そのため、エリオットは彼らの力ができるだけ及ばない海外へ行くことを二度とも選択する。

しかし、見落としてはならないのは、生前も死後もエリオット家を支配していた祖父が両親の厳格な家庭教育に大きく影響を与えていたことである。したがってエリオットは、まるで祖父が生きているかのような錯覚を起こし、彼の存在を強く意識しながら人生を送る。そのことが、1910-16年の彼の詩に表れている。祖父の存在がパリ遊学前後ばかりではなく、ついにイギリスに定住する彼に重くのし掛かっているのである。そうした彼の姿は、1910-16年におけるエリオットの詩の研究には祖父の影響が無視できないことを教えてくれるのである。

注

1. この派については、次のような解説を参照。
「三位一体論を否定し、単一人格の神を主張し、イエス・キリストの神性を認めず、その贖罪を無意味とし、聖霊を神の現存とする教派。人類愛を唱えた社会的な改革にも関心が強い。」(『岩波キリスト教辞典』1144)
2. 「絶対者」の簡潔な解説については、輪島 12-18 を参照。
3. エリオットの発表された詩からの引用はすべて *The Complete Poems and Poetry of T. S. Eliot* による。
4. *Letters, Vol* の pp. 248-49 には、父親が描いた猫のスケッチが挿入されている。このスケッチから推察して、父親が猫好きであったと考えられる。
5. イギリスからの客員教授で、哲学者、数学者の Bertrand Russell (1872-1970) は、学生時代のエリオットが口数の少ない幾分か控え目の人物であったという印象を抱いている (*The Autobiography of Bertrand Russell* 212)。このような彼の印象がエリオット家のモットーの影響を受けた一例と言えよう。
6. 「メンデルの法則」については、次のような解説を参照。
「メンデルが1865年に発表し、近代遺伝学の基礎となった遺伝の法則。生物の形質の相違は遺伝因子によって決定され、交雑によって生じた雑種第一代には、優性形質だけが現れ劣性形質は潜在する(優性の法則)、雑種第二代には、優性形質を現すものと劣性形質を現すものが分離してくる(分離の法則)、それぞれの形質が無関係に遺伝する(独立の法則)という三つの法則がある。」(『広辞苑 第6版』2773)
7. 優生思想については、次のような優生学の解説を参照。
「人類の遺伝的素質を改善することを目的とし、悪質の遺伝形質を淘汰し、優良なものを保存することを研究する学問。1883年イギリスの遺伝学者ゴードンが提唱。」(同 2858)
8. Throop の “To Help the Children” を参照。
9. 母親の “Woman’s Interest in National Affairs” と “The Higher Education of Women” を参照。
10. 彼女の “Institutions and Individual Aid” を参照。
11. 彼女の “Report of the Mission Free School of the Church of the Messiah 1919-1920” を参照。
12. “To Help the Children” を参照。
13. エリオットは祖父が家族にとって “the Great Man” であったと証言している (“To Mary Trevelyan,” 16 Nov. 1942; Spur 4, 269n)。また、彼はこの祖父について, “I was brought up to be very much aware of him: so much so, that as a child I thought of him as still the head of thre family - a ruler for whom in absentia my grandfather stood as vicegerent.” (“American Literature and the American Language” 44) と述懐している。
14. この点については、拙稿「*Prufrock and Other Observations* における語り手たちの視点」を参考にしていることをお断りしたい。

引用文献

- Ackroyd, Peter. *T. S. Eliot: A Life*. New York: Simon and Shuster, 1984.
- Aiken, Conrad. *Ushant: An Essay*. New York: Duell, Sloan and Pearce, 1952. Oxford: Oxford UP, 1971.
- Bakewell, Charles M. *Source Book in Ancient philosophy*. New York: Charles Scribner's Sons, 1907.
- Bergson, Henri. *Time and Free Will: An Essay on the Immediate Data of Consciousness*. 1910. Trans. F. L. Pogson. London: George Allen and Unwin, 1913.
- Bradley, F. H. *Appearance and Reality: A Metaphysical Essay*. 1893. Oxford: Clarendon P, 1966.
- Brooker, Jewel Spears, "Enlarging Immediate Experience: Bradley and Dante in Eliot's Aesthetic" *T. S. Eliot, Dante, and the Idea of Europe*. Ed. Paul Douglass. Newcastle upon Tyne: Cambridge scholars Pub., 2011. 3-13.
- Childs, Marguis W. "From a Distinguished Former St. Louisan." *St. Louis Post-Dispatch* 83, 89 (15 Oct. 1930) : 3B.
- . "Letters Cites City Influence on T. S. Eliot." *St. Louis Post-Dispatch* 86. 46 (16 Feb. 1964) : 2S, 8S.
- Cuddy, Louis A. "Circles of Progress in T. S. Eliot's Poetry: *Ash-Wednesday* as a Model." *T. S. Eliot, A Voice Descanting: Centenary Essays*. Ed. Shyamal Bagchee. London: Macmillan, 1990. 68-99.
- . *T. S. Eliot and the Poetics of Evolution: Sub / Versions of Classicism, Culture, and Progress*. Cranbury, NJ: Associated U Presses, 2000.
- Dante Alighieri. *The Divine Comedy 2: Purgatorio*. London: Bodley Head, 1939. Trans. John D. Sinclair. 1961. Oxford: Oxford UP, 1971. 3 vols. 1939-46.
- Drew, Elizabeth. *T. S. Eliot: The Design of His Poetry*. New York: Charles Scribner's Sons, 1949.
- Eliot, Charlotte Champe. *William Greenleaf Eliot: Minister, Educator, Philanthropist*. Boston: Houghton, Mifflin and Co., 1904.
- . "Report of the Mission Free School of the Church of the Messiah 1919-1920." Scrapbook of Mrs. Henry W. Eliot, Sr. Harvard U Lib. Microreproduction Service, Widener Library., Cambridge.
- . "The Colonial Dames of America in the State of Missouri, Dedication of Memorial." Scrapbook of Mrs. Henry W. Eliot, Sr.
- . "Woman's Interest in National Affairs." Scrapbook of Mrs. Henry W. Eliot, Sr.
- . "The Higher Education of Women." Scrapbook of Mrs. Henry W. Eliot, Sr.
- . "Institutions and Individual Aid." *Christian Register*. Scrapbook of Mrs. Henry W. Eliot, Sr.
- Eliot, Henry Ware, Sr. "A Brief Autobiography." Washington U Archives. St. Louis, Missouri. 1-58.
- . "Report of the Mission Free School of the Church of the Messiah 1919-1920." Scrapbook of Mrs. Henry W. Eliot, Sr. Harvard U Library Microreproduction Service, Widener Lib., Cambridge.
- . "The Colonial Dames of America in the State of Missouri, Dedication of Memorial." Scrapbook of Mrs. Henry W. Eliot, Sr.
- . "Woman's Interest in National Affairs." Scrapbook of Mrs. Henry W. Eliot, Sr.
- . "The Higher Education of Women." Scrapbook of Mrs. Henry W. Eliot, Sr.
- . "Institutions and Individual Aid." *Christian Register*. Scrapbook of Mrs. Henry W. Eliot, Sr.
- Eliot, Henry Ware, Sr. "A Brief Autobiography." Washington U Archives. St. Louis, Missouri. 1-58.
- Eliot, T. S. *Fireside*. 1899. The T. S. Eliot Collection, Houghton Library, Harvard.
- . "[A review of] *The Wine of the Puritans*. [By] Van Wyck Brooks. *Harvard Advocate* 87.5 (7 May 1909) : 80.
- . "The Love song of J. Alfred Prufrock." *Poetry* 6. 3 (June 1915) : 130-35.
- . "Poems." *Blast* 2 (July 1915) : 48-51.
- . "Three Pems" *Poetry* 7. 1 (Oct. 1915) : 21-22.
- . "Observations." *Observations* 8.6 (Sept. 1916) : 295-95.
- . "Publishers' Preface." *Fishermen of the Banks*. By James B. Connolly. London: Faber and Gwyer, 1928. vii-viii.

- . *Dante*. London: Faber and Faber, 1929.
- . "[A review of] *Son of Women: The Story of D. H. Lawrence*. By John Middleton Murry." *Criterion* 10.41 (July 1931) : 768-74.
- . "T. S. Eliot." *Irving Babbitt: Man and Teacher*. Ed. Frederick Manchester. New York: G. P. Putnam's Sons, 1941. 101-04.
- . "What France Means to You." *La France libre* 8.44 (15 June 1944) : 94-99.
- . "Essays, Addresses, and Verses, 1939-1956, with some *Obiter Scripta*." English Text of Speech Delivered in French in Brussels, 4 December 1949. The John Hayward Bequest of T. S. Eliot's Library Manuscripts, King's College Library, Cambridge.
- . "American Literature and the American Language." 1953. *To Criticise the Critic and Other Writings*. London: Faber and Faber, 1965. 43-60.
- . "Address." *From Mary to You* (Centennial Issue [Dec.] 1959) : 133-36.
- . "The Influence of Landscape upon the Poet." *Dædalus, Journal of the American of Arts and Science* 89.2 (Spring 1960) : 420-22.
- . "T. S. Eliot ... An Interview" *Grantite Review* 24.2 (1962) : 16-20.
- . *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot*. London: Faber and Faber, 1969.
- . *The Letters of T. S. Eliot, Vol. 1: 1898-1922*. 1988. Ed. Valerie Eliot and Hugh Haughton. London: Faber and Faber, 2009. 3 vols. 2009-12.
- . *Inventions of the March Hare: Poems 1909-1917*. Ed. Christopher Ricks. London: Faber and Faber, 1996.
- . *The Letters of T. S. Eliot, Vol. 2: 1923-1925*. Ed. Valerie Eliot and Hugh Haughton. London: Faber and Faber, 2011.
- Eliot, William Greenleaf. *Lectures to Young Men*. Boston: American Unitarian Association, 1882.
- . *Discourses on the Doctrines of Christianity*. Boston: American Unitarian Association, 1886.
- Habib, M. A. R. *The Early T. S. Eliot and Western Philosophy*. Cambridge: Cambridge UP, 1999.
- Holt, Earl K. III. *William Greenleaf Eliot: Conservative Radical*. St. Louis: First Unitarian Church, 1983.
- Jain, Manju. *T. S. Eliot and American Philosophy: The Harvard Years*. Cambridge: Cambridge UP, 1992.
- Levy, William Turner and Victor Scherle. *Affectionately, T. S. Eliot: The Story of a Friendship, 1947-1965*. Philadelphia: Lippincott, 1968.
- Miller, James E. Jr. *T. S. Eliot: The Making of the American Poet, 1888-1922*. U Park, Pa: Pennsylvania State UP, 2005.
- Plimpton, George, ed. "T. S. Eliot." *Writers at Work: The Paris Review Interview*. 2nd Series. 1977. New York: Viking P, 1963. London: Secker and Warburg, 1963. Harmondsworth: Penguin Books, 1979. 8 series. 1958-88.
- Pound, Ezra. *The Letters of Ezra Pound, 1907-1941*. Ed. D. D. Paige. London: Faber and Faber, 1951.
- Powel, Harford Willing Hare, Jr. "Notes on the Life of T. S. Eliot, 1888-1910." Unpublished dissertation Brown U, 1954.
- Power, Sister Mary James. *Poets at Prayer*. New York and London: Sheed and Ward, 1938. New York: Freeport, 1968.
- Pritchett, V. S. "'Our Mr. Eliot' Grows Younger." *New York Times Magazine* (21 Sept. 1958) : 15, 72-73.
- Russell, Bertrand. *The Autobiography of Bertrand Russell, 1872-1914*. Vol. 1. 1968. London: George Allen and Unwin, 1978. 3 vols. 1967-69.
- Russell, Francis, "The Return of T. S. Eliot." *Harvard Magazine* 91. 1 (Sept.-Oct. 1988) : 53-56.
- Scudder, Clara H. "In Memoriam: Mrs. Ware Eliot." Scrapbook of Mrs. Henry W. Eliot, Sr.
- Smidt, Kristian. *Poetry and Belief in the Work of T. S. Eliot*. 1949. London: Routledge and Kegan Paul, 1961.
- . "Dikttern og kritikeren T. S. Eliot 75 år imorgen" ("The Poet and the Critic T. S. Eliot 75 Years Old

- Tomorrow"). *Aftenposten* 422 (25 Sept. 1963) : 3.
- Smith, Grover, ed. *Josiah Royce's Seminar, 1913-14 : As Recorded in the Notebooks of Harry T. Costello*. Westport, Conn: Greenwood P, 1981.
- Sold, John J. *The Tempering of T. S. Eliot*. Ann Arbor, MI: UMI Research P, 1983.
- Spurr, Barry. *'Anglo-Catholic in Religion' : T. S. Eliot and Christianity*. Cambridge: Lutterworth P, 2010.
- Symons, Arthur. *The Symbolist Movement in Literature*. 1899. New York: E. P. Dutton, 1958.
- Throop, Lucy. "To Help the Children." Scrapbook of Mrs. Henry W. Eliot, Sr.
- Watson, John, trans. *The Philosophy of Kant: As Contained in Extracts from His Own Writings*. Glasgow: Jams Maclehose, 1908.
- Wyatt, William K. Jr. "Nobel Winners." *St. Louis Post-Dispatch* 81. 315 (29 Nov. 1959) : I-1, I-8.
- 大貫隆・名取四郎・宮本久雄・百瀬文晃. 『岩波キリスト教辞典』. 東京: 岩波書店, 2002.
- 古賀元章. 「*Prufrock and Other Observations* における語り手たちの視点」『福岡教育大学紀要』61号1分冊 (2012) : 17-28.
- 新村出編. 『広辞苑 第6版』. 1955. 東京: 岩波書店, 2008.
- 徳永陽三. 『T. S. エリオット』(人と思想 102). 東京: 清水書院, 1992. 全188冊. 1966-2009.
- 輪島士郎. 『T. S. エリオットの詩と真実』. 金沢: 高島出版, 1988.